

りんどう

褐斑病

発生の動向

- 1 平成 28 年以降、ほぼ毎年発生がみられている（図 1）。
- 2 令和 5 年は、例年発生が見られない 7 月下旬から発生が確認された（図 2）。発生圃場はいずれも令和 4 年秋期に発生した圃場であった。
- 3 令和 5 年 9 月中旬の発生圃場率は 25.0%（平年 6.8%）と令和 4 年と並び過去 10 年で最も高く、越冬伝染源量は多いと考えられる（図 1、2）。

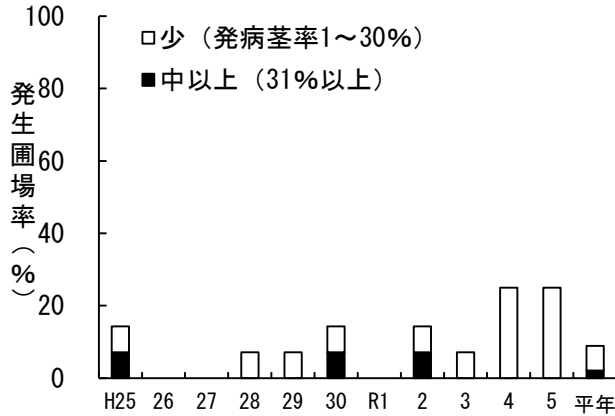


図 1 褐斑病の発生圃場率の年次推移（9 月中旬）

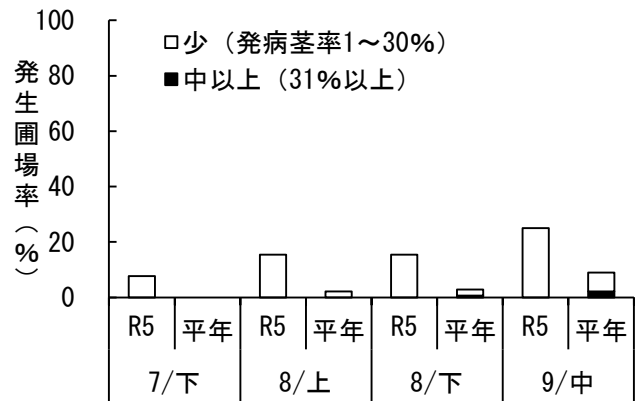


図 2 褐斑病の時期別発生圃場率

防除対策

- 1 6 月下旬～7 月中下旬にかけて一次感染し、2～3 週間の潜伏を経て 7 月下旬～8 月上旬頃に初発がみられる。特に、前年の発生圃場では本年も発生するため、6 月下旬～7 月下旬に効果の高い薬剤を使用するなど、計画的に防除を実施する。
- 2 定植年での発生を防ぐため、定植直後から防除を徹底する。
- 3 薬剤が到達しにくい下位葉や畝の内部、畝の北側等の日当たりの悪い場所で発生が多く見られるため（図 3）、薬液が株全体に十分かかるように散布する。
- 4 株仕立てが不十分であったり、風通しの悪い圃場では発生が多くなるため、適正な茎数に管理する。
- 5 被害の拡大防止と伝染源除去のため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋める等して処分する。
- 6 秋に発生がみられるため、採花後も圃場内を見回って発生の有無を確認し、被害茎葉は適切に処分する。



図 3 多発事例（8 月上旬）※畝の内部での発生が多い

葉枯病

発生 の 動 向

- 1 令和5年発生面積率（採花部）は42.9%（平年6.2%）で、過去10年で最も高かった（図1）。
- 2 令和5年は例年発生が少ない6月下旬から広く発生が確認された（図2左）。採花部では7月下旬の発生圃場率が平年より高く、発生程度の高い圃場も確認された（図2右）。
- 3 令和5年は秋期の発生が多かったため、越冬伝染源量は多いと考えられる（図2）。

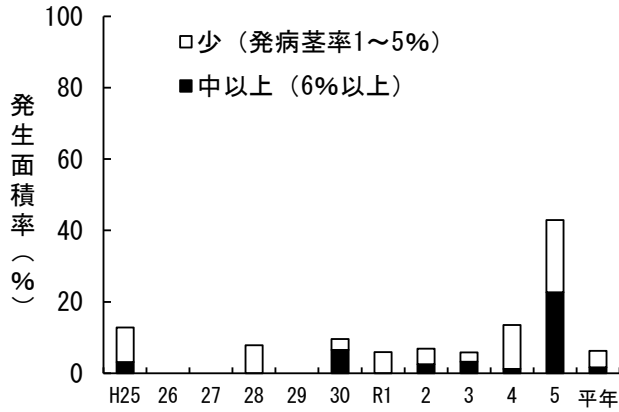


図1 葉枯病の発生面積率の年次推移 (採花部、年間評価)

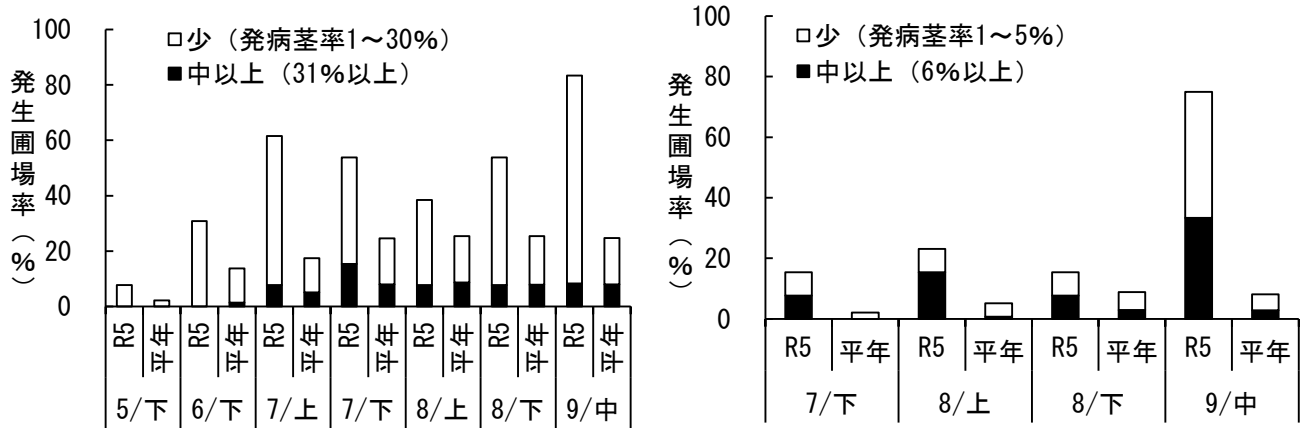


図2 葉枯病の時期別発生圃場率 (左：株全体、右：採花部)

防 除 対 策

- 1 降雨が多い場合に多発する。感染から発病までの潜伏期間は3~4週間である。
- 2 薬剤散布は10~15日間隔で行う。前年発生が多かった圃場や、下葉を観察して発生が見られる場合は、10日間隔で予防散布を行い上位葉への感染を防ぐ。
- 3 降雨が続く場合は、散布間隔を狭め、週間天気予報を参考にして降雨前の散布を心掛ける。
- 4 感受性に品種間差が見られ、エゾ系で高く、ササ系で低い。
- 5 定植初年株は特に感受性が高いので、防除を徹底する。
- 6 弱小茎や、こぼれ種から生じた茎葉は、早くから発病しやすいため、折り取り処分する。
- 7 早生種では収穫以降も9月末まで防除を行う。